

Title	エマソンの文体
Author(s)	中野, 正順
Citation	英文学評論 (1954), 1: 84-98
Issue Date	1954-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_1_84
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

エマソンの文体

中野正順

Ralph Waldo Emerson (1803-1882) の伝記家や批評家の間で取り上げられる問題の一つは、一体エマソンは詩人か哲学者かと云ふことである。エマソンは詩人であつて哲学者でないと言張する側の人々は概ね詩人や文学者のうちに多く、例えば Oliver Wendell Holmes は American Men of Letter 中の一書に於てエマソンは「直観、洞察の人」であり、「予言者」であり、「神秘主義的詩人」であるといふ。George Edward Woodberry は English Men of Letter の一書に於てエマソンはアメリカ文学中の偉大な思想家だと認めてゐるが、結局彼の本質は詩人であると云つてゐる。更に明白なそのことを語つてゐるのは Richard Garnett が Great Writers 中の一書に於ける次の文章である。

He could see, but he could not prove; he could announce, but he could not argue. His intuitions were his sole guide; what they revealed appeared to him self-evident; the ordinary paths by which men arrive at conclusions were closed to him. To those in spiritual sympathy with himself he is not only fascinating, but authoritative; his words authenticate themselves by the response they awake in the breast. But the reader who will have reasons gets none, save reason to believe that the oracle is an imposition.

(彼は悟ることは出来たが裏証することは出来なかつた。披瀝することは出来なかつた。彼は自分の直観を唯一とたのみ、直観に現れるものは彼には自明のものようであつた。人々が結論に到達する普通路(推理力)は彼には閉ざされていた。彼の生命と靈的共感を得る者にとつては、彼は常に魅力あるばかりでなく權威があつた。彼の言葉は心情に反応を呼ぶことによつて確証づけられる。併し理由を求めようとする読者にはその託宣はインチキキであると信ずる理由しか得られないのである。)

その他 James Russel Lowell, P. E. More, Van Wyck Brooks にも類似の言葉が見られる。

次にエマソンは分析的能力があり立派な哲学者であると主張する側の人々は主として哲学者や宗教家の間に多く、例えば Edwin D. Mead は思想の首尾一貫性を以てエマソンの特色とし、Moncure Daniel Conway はエマソンの思想はメラメラの様に見えるが、よく観察すると一定の法則があり其に依つて彼の思想は系統的に展開していると云つて次の様な興味ある文章を述べてゐる。

As a man stationed in the sun would see all the planets moving around in one direction and in perfect harmony, while to an eye on the earth their motions are full of crossings and retrogressions, so he, from his central position in the spiritual world, discovers order and harmony where others can discern only confusion and irregularity.

(太陽に在る者には宇宙の天体は一定の方向に廻転して見え、地球に在る人には天体の運動は徒らに交錯と逆転の姿に見えるように、靈界の中心に在るエマソンからは、他人には困乱と不規則しか写らない世界が秩序と調和の姿に見えるのである。)

実際吾々がエマソンを読んで感じることは、彼の散文は所謂絵画的表現から成る特有な文体を具えていることである。その点から彼は詩人と云えるし、また思想の点からは崇高深遠な哲学者とも云い得よう。只自分より以前の種々の体系を綜合し、自分の独創的思索を以てそれ等を展開して新しい体系を創めることを以て哲学者の性格とするならば、エマソンが哲学者であ

ると云う断定には多少の疑義がある。只吾々の詐らない実感はエマソンは両者の性質を兼ね具えていると云うことである。この事は彼の文体によつて証明されることだが、今彼の文章を一々引用する代りにその文体の理論づけともなるべき彼の言語観を覗いて彼の特色を窺い、引いては文学に於ける言語の持つ性格に關して一つの随想を述べるのが本論の目的である。

扱てエマソンの言語に關する思想は一八九六年に出された彼の「自然論」の一章 *Language* の内に纏められている。本論の出発点として次にその要旨を述べる。

言葉 *Words* は自然の事実の記号であると先ず云う。この事実の記号が言葉であると云う命題は、一見吾々の常識となつてゐる言葉の定義と一致してゐるようと思える。その際の「事実」とは自然界の物象、人間の經驗を示し、それ等を象徴 *symbolize* したものが言葉である。所がエマソンの云う自然とは思想の運搬車 *vehicle* である。換言すれば、内的世界に創造される諸々の物象とその変化をあらわしたのが自然である。だから普通吾々が云う所の言葉は吾々の經驗や自然の事実そのものを象徴の究極対象とするのであるが、エマソンの云う言葉は自然を媒介として、それを通して内的世界に或る連がりを有するのである。

だからエマソンに取つては、或る物質的特性をあらわした言葉も精神的或は知的事実をあらわしてゐるのである。例えば、

Right means straight; wrong means twisted. Spirit primarily means wind; transgression, the crossing of a line; supercilious, the raising of the eyebrow. We say the heart to express emotion, the head to denote thought; and thought and emotion are words borrowed from sensible things, and now appropriated to spiritual nature.

(「正しい」は「真直ぐな」を意味し、「不正な」は「曲れる」を意味する。「精神」は元來「風」であり、「違犯」は「線を越えること」であり、「傲慢な」は「眉を上げる」と云うことである。情緒をあらわすに「胸」と云い、思想をあらわすに「頭」と云う。だから「思想」と「情緒」は知覚し得る事物から借られ今では精神的性質に適用されている言葉である。)

次にこう云つた精神の象徴現象は上記のように言葉ばかりに見られないで、広く自然界のうちにも見られる。即ち特殊の自然の事実が特殊の精神的事実を象徴していることがある。例えば、

An enraged man is a lion, a cunning man is a fox, a firm man is a rock, a learned man is a torch.
A lamb is innocence; a snake is subtle spite; flowers express to us the delicate affections. Light and darkness are our familiar expression for knowledge and ignorance; and heat for love. Visible distance behind and before us is respectively our image of memory and hope.

(憤怒した人は獅子である。狡猾な人は狐である。志操確固な人は巖石である。学識ある人は炬火である。仔羊は無邪気である。蛇は狡い悪意である。花は吾々に妙な愛情を表現する。光明と暗黒は知識と無智を意味する吾々の慣用語であり、熱は愛の慣用語である。吾々の後と前に見える距離はそれぞれ記憶と希望の画像である。)

或はまた、

Who looks upon a river in a meditative hour, and is not reminded of the flux of all things? Throw a stone into the stream, and the circles that propagate themselves are the beautiful type of all influence.
(瞑想に耽る時河川を眺めて万物の流動に思い及ばない者があろうか。その流に一個の石を投げて見よ。その時四方に拡がって行く幾つかの環はあらゆる感化の立派な典型である。)

こう云つた象徴は、特殊の自然の事実と特殊の精神との間に起る類似 analogy に依る現象即ち Metaphor の概念である。では斯う云つた精神と物質との関係はどうして出来たのであろうか。この Metaphor の概念はどうして発生したのであろうか。エマソンは、これは言葉の発生した太古の際に生じた出来事で人智では計り知られないことだと云っているが、それは兎に角、この類似現象即ち Metaphor の発生は人間を通して行われること丈けは間違いない厳然たる事実である。人間は謂

わば *analogy* であつて、彼は自然の凡ゆる物象の中心におかれてこれ等の物象の關係を究めようとするものである。抑々自然界の凡ゆる物象はそれだけでは価値がない。それだけでは恰も両性の片方丈のようなもので、それ等が人間の歴史と結びつくことに依つて始めて全き生命を得るのである。即ちエマソンの云う所によれば、各物象が人間に向つて關係線 *a ray of relation* を放射する時にその物象は意味を生じる。彼の云う關係線とは人間を通して精神と自然との間に存する *analogy* の働である。だから、

The instincts of the ant are very unimportant, considered as the ant's; but the moment a ray of relation is seen to extend from it to man, and the little drudge is seen to be a monitor, a little body with a mighty heart, then all its habits, even that said to be recently observed, that it never sleeps, become sublime.

(蟻の本能は、それ自身としては、大して重要なものではない。然し一条の關係線が蟻から人に及ぶことが分るや否や、またこの小さい労働者は警告者であり偉大な心を持つ小さい身体であることが分るや否や、それが持つ凡ての習慣は、最近発見されたと云われるあの蟻は決して眠らないと云う習慣までが、崇高なものとなる。)

こう云う精神と自然との間にある關係こそ根本的言語現象であつて、エマソンはその証拠として野蠻人が絵を用いて會話することを挙げてゐる。即ち吾々が歴史を溯つて行くにつれて言葉は繪画的になり、詩の状態になる。即ち精神的事実が自然物によつて象徴される。これが凡ての言語の出発点であり窮極点である。また他の例として、エマソンはどんな國語のイデオムも、偉大な作家の文章に於てはどれも相似たものになると云つてゐる。

かく言語を構成するものは、精神と自然とを正しく連結する力、即ち、物と心との間に存する *analogy* の作用である。故に品詞 *part of speech* は悉く *Metaphor* の形をとり、物は心の *Metaphor* と考えられるだろう。だからエマソンは鏡に

映つた顔と自分の顔とが照応するように、物質の法則は心の法則に照応すると考えるのである。例えば次のように物理学の公理は倫理の法則を示している。

.....“the whole is greater than its part”; “reaction is equal to action”; “the smallest weight may be made to lift the greatest, the difference in weight being compensated by time”;.....

〔全体はその部分よりも大である。〕「反動力は動力と相均し。」「重量の相違を時間で償えば、最小の重量で最大の重量を上げることが出来る。〕

同じように自然の事実を以て道德の真理をあらわしたのが格言 proverb である。

A rolling stone gathers no moss; A bird in the hand is worth two in the bush; A cripple in the right way will beat a racer in the wrong; Make hay while the sun shines; 'Tis hard to carry a full cup even; Vinegar is the son of wine; The last ounce broke the camel's back; Long-lived trees make roots first; and the like.

（転石には苔は生えない。手中の一羽の鳥は藪の中の二羽の鳥に価す。正道をゆく跛者は道を間違える競争者に勝つ。日の高いうち乾草を作れ。水を一ばい盛つたコップを真直ぐに運ぶのはむづかしい。酢は酒の子。最後の一オンスが駱駝の背骨を折る。長命の樹は先ず根を張る。等。）

この絵画的表現と analogical relation とは格言ばかりでなく、寓話 fable に於ても、譬話 parable に於ても、譬喩 allegoric に於ても見られるだろう。

かかる物と心との関係は、単に両者間の類似と云つた普通の関係、従つて詩人などの特殊な人によつて想像されるものではなく、それは神の御心 Will of God の中に存すとヒュマンソンは考へる。即ちこの物と心との関係の起因を人間の経験とか論理以上

のものに帰する。そしてそれは神の御心に在るから何人によつても認められる筈である。かくヒマンソンは言語の観点から物と心との深い關係を洞察して次のように結論する。

There seems to be a necessity in spirit to manifest itself in material forms; and day and night, river and storm, beast and bird, acid and alkali, pre-exist in necessary Ideas in the mind of God, and are what they are by virtue of preceding affections, in the world of spirit. A fact is the end or last issue of spirit. The visible creation is the terminus or the circumference of the invisible world.

(心靈には物質的形体で自己を表現しようとする必然性があるように思われる。昼と夜、河と嵐、獸と鳥、酸とアルカリ、いずれも神の御心のうちに必然の理念となつて先在し、此の精神界に於ける先行的變易によつて現在の姿をとるのである。一つの事實は心靈の目的或は最後の結果である。眼に見える創造物は眼に見えない世界の終点が周辺である。)

以上ヒマンソンは、「言葉は自然の事實の記号である」Words are signs of natural facts と云う命題から出發して、彼獨特の象徴的自然と物心間の analogical relation との上に立つ言語観から、「特殊の自然の事實は特殊の精神的事實の象徴である」Particular natural facts are symbols of particular spiritual facts と云う命題を演繹し、遂に「自然は靈の象徴である」Nature is the symbol of spirit と云う命題に到達する。この第三の命題はヒマンソンの自然觀の根本思想であつて彼の言語論はこの命題の實証の爲になされた論說の一部をなすものである。即ちヒマンソンはこの世界を創造する所の究極の原因 final cause を信じ、世界の凡ての自然物はこれらから出發し結果したもので、結局この原理を實証するために存在するのである。この隠れた生命と究極の原因を示し、その第一原理を實証する物象の働きをヒマンソンは物象の効用 Use と名づく。そしてこの凡ての物象の持つ効用を四大別して便益 Commodity, 美 Beauty, 言語 Language, 訓練 Discipline とし、その一環として言語を取扱つたものである。かく言語は自然物のあらわす効用の一つであるから、ヒマンソンにとつては言語は単

なる符号でなく一つの立派な自然物であり、従つて言語も亦 the symbol of spirit である。

ここに於て筆者は暫く言語の symbolization に関して考察するが、それは所謂言語学の立場からでなく、それは文学に於ける言語、換言すれば文学現象或は文学する心に於ける言語の在り方の一つとして言語の symbolization を次に考えて見度
50。

吾々は吾々の心に特殊な知覚 perception 例えば鳩の知覚を得る時は、There is a dove とか I See a dove と云う音声を發する。これが言語である。所が吾々の知覚現象はそう簡単でなく、symbol と symbolized との間には必ずしも直接の連繋のない場合がある。言語は知覚に現れる事相の報告とすれば、言語の一つの姿として報告のまた報告なるものが存するだろう。例えば I See a dove に対し、第二の人が He says he sees a dove と云い得るだろう。更にまたその報告として They say that he says he sees a dove. と云い得よう。つまり言語は報告のまた報告のまた報告と云つた性格を持つことに先ず着目しなければならぬ。

次に symbol と symbolized との間には直接の關繋が必ずしも存しない第二の場合として、例えば實際眠くなくとも I am sleepy と云う言説が存し得るのである。更に極端な例として My dead mama watched over my bed last night. と云う文章である。この時の symbol によつて symbolize される実体は實際外界に存在しない。だからこの言説は当人の心中で紡き出された或意味を表わした音声に過ぎないだろう。この実体のないものを symbolize した言語は、現実主義物質主義の人から見れば徒らに空虚なもの価値がないかも知れない。然し吾々は言語の持つかう云つた世界をよしとし貴しとする。抑々 symbol は symbolized から独立し得ると云う事実から、(一)吾々の最高の推理力や想像力が引出されることを忘れてはならない。即ち吾々の心は自由に飛躍して実体ならざるものを示す symbol を創り、また他人のそう云つた symbol のまた symbol を創ると云う力が生じる。(二)実体ならざるものを現わした symbol を創ると云うことは、文学の世界では快樂 pleasure を与える色々な手法に發展し、宗教倫理の世界では聖なるものに近づかんとする人の努力或は人を向上させる所の

理想追求の契機を生じるだろう。殊に文学は主として感情表現の世界とすれば、文学の評価に於ては徒らに論理で証明される世界とか実体を現わす symbol は第二義的のものとなる。実体を必ずしも表わさなす symbol の世界はこそ Gulliver's Travels が存し Alice in Wonderland が存し The Scarlet Letter が存し、また同様にヘマンの Essays が存するのであつて、彼の spirit とは universal soul 或は Oversoul、は徒らに非実体的なものの架空的なものとして捨て去るべきものではなす。

然しこう云つただけでは現実主義や物質主義者の批難に十分答へた事にならないで、こう云う世界は恰も荒唐無稽な或は空中樓閣の世界に見えるかも知れなす。Language is the symbol of spirit と云つたヘマンの世界は徒らに超感覺的非実在的世界に見えるだろう。なぜなら symbol と symbolized の間に又次のような言語現象が起るからである。

それは言語は必ずしも事実を伝えなすこと、symbol は必ずしも symbolized と直接の關係がないこと(この關係を symbol-symbolized を以て示す)を忘れた symbol 即 symbolized と云つた態度である。こう云う仮定的態度は實際存在しないものの美しい symbol を作つて而かもその存在を信じている態度である(これを symbol-symbolized を以て示す)。これは相当教養ある人々の間にもよく見られる現象である。例えば「スタインベックは彼の作品に於て資本主義の圧力の下に在るカリフォルニア州の民衆生活の実態を描写している。そこには現代アメリカ資本主義社会の底に燦々つてゐる或る民衆の欲望が描かれてゐる。これは外ならぬアメリカ社会変革を求めゐる vital force である。スタインベックはこう云つた第一線の作家である」と云つた言説である。これは尤もらしく真実らしく聞こえる言説であるが、それだからと云つてそれを真実であると速断するのは、言葉通りの symbol に捉われ過ぎてその実体を妄信する態度である。これこそ超感覺的非実在的世界であり荒唐無稽の世界である。然らば Language is the symbol of spirit と云つた「見荒唐無稽らしき symbol-symbolized の世界は上記の symbol-symbolized の呈する荒唐無稽の世界と同じであらうか? 筆者は断じて否と答へる。この筆者の解答の趣旨は、先に筆者が実体を symbolize した所謂論理的な symbol は文学の世界に於ては第二義的ものだ」と云い、それに

対し人間を理想に向わしめ聖なるものに近ずけんとする人間の努力を symbolize した世界を我々は善しとし尊いものとする
と云つた筆者の言葉の内に暗示されるだろう。そしてこの 両世界の差異は symbol—symbolized の世界は論理的であり、
head 丈けの世界であるが、symbol+symbolized の世界は非論理的であるが head と heart の融合した全体的世界である
所に基因している。筆者は尙この点をエマソンによつて説明して行き度いと思う。

エマソンは一八三三年の歐洲旅行から帰つてからはコンコードの森に都塵を避け朝な夕な自然を友とし思索の生活を送つた
のであるが、これは単に風雅を友とした隠棲の生活ではない。彼は自然に接する毎に「實在とは何か」と云う問題に取つ組ん
だのである。彼はテュルゲーの言葉—— He that has never doubted the existence of matter may be assured he has no aptitude
for metaphysical inquiries (物質の存在に疑問を抱いたことのない者は形而上の問題に対しては適してはいないと断言出来る) を引いてい
るように、彼は常に自己の感覚の report は果して確實なものか、感覚が自分の心に与えるものは果してそれに相当したもの
が外界に存在しているかどうかと云つた疑問に絶えずつかれたのである。然し凡ての自然は自己を通して世界の意義を人間に
伝える。人間はこの世界の意義に到達すべく自然に訓練されるのである。そしてこの訓練の目的が宇宙の究極原因ではないか
と云う疑問が更にエマソンの心に浮ぶ。かく自然は果して外部的に存在するかどうかと云つた疑問はエマソンを徒らに絶望の
淵に追い込まないで、彼は却つてその中から健全な結論に到達したのである。即ち自分の五官の正確さを吟味し得ない限りは
自然は自分にとつては觀念である。然し我等の好むと好まざるに限らず偉大な現実是我等の面前に存在する。自然は觀念であ
り幻影であると云つても我々の面前の自然の偉大さ自然の法則は動かされない。かくエマソンは自然の幻影の中にも自然の不
易性を観取する。かくしてエマソンは自然は実体に非ずして、現象と見做し、或は一個の出来事や一個の印象と見做し、その
必然的實在性を靈の作用に帰したのである。

かく自然に対する人間の感覚に関する疑問から出發して彼の心は絶えず自然物によつて訓練を受け、自然物の輪廓と表面を
通して原因 causes と心靈 spirits を眺める。そこには常に心は天に向けられる所の求道精神と云つたものがある。そしてエ

マンンが自然物を究極的実在と見ない態度は、彼の言語論の中で物は心の metaphor であり従つて言語は心の metaphor であると云つてゐる彼の象徴論のうちに見られる態度である。そこにはエマンンの求道的な一つの強い感情の要素が存在してゐることを見逃してはならぬ。¹¹

爰で再び metaphor に關する随想を許されるなら、I have been waiting ages for you! とか、He has got tons of money! と云う metaphor には感動的要素が見られ、これの文存通りの解釈は一つのたゞ言となる。同様に月を見て之を a lady と云ふ a silver ship と云う時の metaphor には或る希望的感情が窺われる。かく文学に於ける言語の作る metaphor は二つの物に共通し類似する所の単なる感情や思想から成立するばかりでなくそれ等を取扱ふ作者の感動や欲望と云つた強い感情的要素が存在してゐる事を見逃してはならない。即ち常に「実在とは何か」と云つた日夜迫る問題に答えようとするエマンンの天に向けられた心、この真理を求めようとする心、この心が自然物によつて日々訓練され、そこから生れる求道的精神のうける種々な経験の中に彼は原因と心靈とを窺取するのである。こう云つた求道的な感動が彼の云う metaphor や analogy の根底に流れてゐるのであつて、ここに起因する象徴的自然と物心間の analogical relation との上に彼の所謂 Language is the symbol of spirit と云う言語觀が成立するのである。

以上 Language is the symbol of spirit と云う世界、即ちエマンンの metaphor の世界が symbol—symbolized の世界と異なる点は上述のような求道的精神とも云うべき全体を求める強い感動に支配されてゐると云うことである。この世界は必然的に創造的である。聖なるもの大なるものを求めて行く過程の一つ一つの内には或る確信 certainty を直観する。そしてその過程は同時にその一つ一つの心の経験を整理して調和融合された一つの大きな物を創り出す心の働きである。爰に筆者はコウリッチの所謂詩に於ける Imagination と宗教に於ける Reason に似た心の姿を見る。更に又ニウマンが信仰を求めて日夜一步一步聖なるものに近づいて行く時の彼の心の創造的な姿を見るのである。即ちこの三人のうちに全体的なもの、一なるもの、永遠なるもの、聖なるもの、を直指して精進する創造的な心の姿が共通に見られる。詳言すれば、コウリッチが Ina-

gination と Fancy の性格を説くところ、Biographia Literaria, XIII に於て知覚 perception は決して受動的でなく創造的であること、従つて我々の世界は我々自身が作つて行くのである。こう云つた心の創造的な働きを彼は第一想像力 primary imagination と呼び、次にかくして創られた物を分解し整理してそれ等を理想化し統一しようとする心の働き、こう云つた心の再創造的な働きを詩に於ける第二想像力 secondary imagination と呼んでゐることや、宗教と倫理に關しては Biographia Literaria, X に於て信仰は冒險的なものである、それは憧憬の対称物に對する確信を以て始まり、その確信を實踐して行くうちにそれが眞実なものになつて来るよと云う、自らその対称物を創造する心の働きを Reason と呼んだことや、更にニュウマンが「大學說教集」に於て、眞理 religious certainty は我々に依つて希求されなければならぬ、信仰の証明は知識では出来ない、聖なるものを一步一步求めて行く我々の努力の過程に於て我々自身が實証するのであると云つたことは、正にコッリッチの Reason の姿である。このことはニュウマンの Grammar of Assent に於て一層明確にされてゐる。即ち宗教的眞理は、probabilities の蓄積によつて証明されると云う。probability とは科学的に証明出来ないが、眞理を求める強い欲求とその過程のうちに我々が感じる確信 certainty である。かう云うコッリッチやニュウマンの思想に着目する時、この彼等と心の姿は正にエマソンが自然の千変万化の姿の内に心靈や原因を求めて精進して行く彼の心の姿でもあることを感じるのである。

かくエマソンの言語の世界は symbolization の観点から眺めると symbol が symbolized から独立した世界であり、そうした意味での非現実な超感覺的な非論理的な世界であつて、そこに存在する眞実或は眞理なるものは、symbol = symbolized の論理的な世界の眞理のように科学的に實証し且つ之をそのまま report し得るようなものでなく、それは憧れ求めて一步一步進んで行く熱意とその経験の内に顕現されるもの、換言すれば我々の全人格的存在としての実践生活のうちに展開し創造されて行くもの、即ち head と heart との融合した世界である。之はまたエマソンの metaphor の世界であつて、永遠なもの全一なものを求める所の強い感動を以て個々の自然物を整理統合すると云つた再創造の世界である。これがエマソンの

symbol や metaphor が単なる report と異なる所以であり、かう云う report の世界にない真理こそまた文学の世界に於て我々が求める真理である。この真理のうちには我々の感情や情緒の類似や共通の姿のみならず、人間をよりよき個人的社会的行為の実践に促す感動が存在するのである。

こう云つた真理を含んだエマンソンの言語の世界、即ち Language is the symbol of spirit 或は Language is metaphor の世界に処する全人格者の心には、詩に於けるユウリッチの Imagination の姿と、宗教・倫理に於ける Reason とニエウマンの Faith の姿が窺われる。だからエマンソンの言語は彼の所謂 Oversoul (彼は智的には之を Reason と名づけ、自然と関連せしめる時之を Spirit と名づけてゐる) を求める心の闘いの姿を、そうした動的な心の姿を表現したもので単に自然の日夜のたたずまいを写したものではない。ここにエマンソンの散文の現わす特色の生れる原因がある。あのニエウマンの散文の文体は彼の信仰に近づこうとする一筋のひたむきな心の歩みから生れたもので、そこには統一と調和とからかもし出された独特の慈味と魅力があるが、これに反しエマンソンに於ては心靈への強い憧れと「実在は何か」と云う自然に対する疑問とが常住交錯し、直観的に且つ断片的にあらわれて来る彼の Oversoul の思想を中心として、彼の心のもがく色々な経験がぐるぐる廻転し metaphorically にまた絵画的に表現されてあの特有な文体の綾を織り成したもので、この所にニエウマンとエマンソンとの文体の間に興味ある差異が認められるのである。

そしてエマンソンの文章のもつてゐる metaphor なるものは彼にあつては心と物との間の analogical relation と求道的感動から成立してゐるばかりでなく、更に進んで彼の文章に接する者の心にもそう云つた精神的状態を引起すと云う性格を持つてゐることを見落してはならぬ。ラスキンが永い人生の経験とその深い洞察から、思想の深遠なもの程穩れた方法や寓話 parable に依る以外に表現することが出来ない、我々が、それを理解しようとする為には我々自身がその思想の持主と同等の真価の所有主とならなければならぬ、即ち思想家はその思想を我々の手助けとして我々と与えるのでなくして、我々の方から求めようとする努力への報酬として与える為に彼の思想がそう云つた形で現わされるのであると述懐し、そう云う思想家達の占める世

界をエリジアムやフォールブル・サン・ヂェルマンの社会或は黄金の鉱脈にたとえて我々の求道の熱意と努力とを喚起しているが、それと同様にエマソンの文体に接するとその象徴的様相 *metaphorical aspect* のうちに *Over-soul* の顕現とそれに對する彼の求道的熱意を感じると同時に、我々自身の心のうちにもまた求道の熱意と努力とが喚起されるだろう。この熱意と努力とが我々の心の内に喚起されると云う所に、人間の心なるものは始め自然の姿を通して山の彼方に遠望した *Over-soul* とは結局同じ本質から出来ていると云つた大きな自覚に到達するだろう。これは外ならぬ後に展開して来るエマソンの *Self-Reliance* 自恃論の思想であるが、こう云つた契機をはらんだ *metaphor* の姿こそエマソンの散文の持つ獨特の滋味と云うべきものである。

以上筆者は「エマソンの文体」と題して述べて来たことは、文学に於ける言語（文字ではない）の在り方、文学に於て言語が文学のモラルとどう云つた關係に於て展開して行くか、その姿を見ようとすする筆者の *project* の一環として取上げたもので、即ちエマソンの言語觀を見て行くと同時にそこに広く文学に於ける言語の姿、換言すれば文学に於ける *symbolization* と *metaphorization* の一つの姿を取扱つたのである。その際 *symbol* は「事実」*fact* を表わす単なる *sign* ではなくて云う「事実」に關する問題が含まれているが、と同時にその「事実」を表現する所の命題 *proposition* に對する我々の *assent* 同意或は *belief* 信頼と云つた第二の問題が必然的に伴つてゐる。この第二の問題はエマソンの所謂 *Intuitive Sense* に關連するものであつて、この題目は他日稿を改めて考察する考である。

- 註 1 Ralph Waldo Emerson (Boston: Houghton, 1885), p. 390
- 2 Ralph Waldo Emerson (New York: Macmillan, 1907), p. 176
- 3 Life of Emerson (London: Scott, 1888), p. 93
- 4 Works, I, 353
- 5 Shelburne Essays

- 9 America's Coming of Age.
- 7 The Influence of Emerson (Boston : A. U. A., 1903) p. 236
- 8 Emerson at Home and Abroad (Boston : Osgood) p. 1882
- 9 フーネルは Discourses in America に於ける Emerson 論に、彼を詩人としては最上のものでなく、また哲学者としても重んじていない。併しその述べることによつてヘヤソンの色々の価値を認めているが、要するにヘヤソンは詩的技巧から見た詩人としては余りに思想的であり、哲学者としては体系的ではない。だが技巧や体系に束縛されない創造的志向と云つたものがあると述べている。
- 10 彼は Words are signs of natural facts といふ命題から出發して Language is the symbol of spirit 或は Language is metaphor といふ境地に達したかその際 words といふわなびの language といふこと、即ち單なる functions of sign としての letter と sounds 丈の問題でなく、それに更に有機的全体的なものが加わつたことに着目しなければならぬ。